

# A-141 大学生の家族との食事の共有についての認識

愛知教育大 ○金沢扶巳代 米川五郎

女子栄養大 足立己幸

【目的】 家族そろって食事をする（食事を共有するという）ことは家族の情緒的関係の形成、文化伝承の機会の原点とされている。にもかかわらず、家族の食事共有の度合いは減少しており、老人層、主婦層、幼児層では摂取栄養素構成に偏向をもたらしていることをこれまでに明らかにした。そこで、生活時間が不規則である、といわれている大学生においては、食事時間もまた不規則になる傾向が強く、家庭内食事の機会の減少、中でも家族との食事の共有の度合いが減少していることが予想される。このような学生が、将来主に小、中学校の教師となり、家庭科あるいは給食の時間などを通して児童・生徒の食生活に関わっていくことを考えるとき、家族との食事の共有と食事の食べ方の問題をどうとらえたらよいか、を探る手がかりとして、本報では、1.家族との食事の共有の実態、2.食事の共有に対する学生の認識、を明らかにすることを目的とした。

【方法】 愛知教育大学教育学部家政学専攻1年57名、2年44名の女子学生計101名とその家族を対象とし、54年1月下旬に一週間にわたる食事の共有状況、ならびにうち3日間について食事内容、及び家族との食事の共有に対する意識調査を行なった。

【結果】 1.家族との食事の共有の実態。家族というしに食べていない学生は、朝食で61%、夕食で40%を占めている。家族というしに食べていない学生は、いっしに食べている学生の食事と比べて、ビタミンA、ビタミンB<sub>2</sub>、カルシウム、ビタミンCが著しく少ない。

2.家族との食事の共有に対する認識。無関心層が多い。